

ウスバキトンボ（トンボ科）の京都大学瀬戸臨海実験所構内（和歌山県白浜町）への出現

Appearance of wandering glider *Pantala flavescens* (Libellulidae) at the campus of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University in Shirahama Town, Wakayama Prefecture, Japan

久保田 信

はじめに

ウスバキトンボ *Pantala flavescens*（トンボ科ウスバキトンボ属）は、全世界の熱帯から温帯地域にかけて広く生息し、日本でも毎年、春から秋季にかけて北海道までの各地で見られる。お盆頃に多数が飛翔していることから、「精霊とんぼ」・「盆とんぼ」等と呼ばれ、“先祖のお使い”とされたりする。

本種は体をできるだけ軽くし、大きな翅でグライダーの如く気流に乗って海を渡り、北へ北へと移動する習性がある。しかし、我が国では南西諸島を除き、耐寒性がないので冬には死滅する。日本産トンボ類中、最短期間の約1ヶ月で卵から成虫になれることから、たとえ日本各地で子孫をつくり続けても、冬越しができない地域は広く、年中生活ができる場所は我が国では沖縄県のみである（新井, 2014; むさしの里山研究会, 2016a, b）。従って、原産地の熱帯・亜熱帯地域から温帯地域の日本本土へも渡りをして、一時的に進出するに留まっている。これまで本種の出現状況について、和歌山県での報告が皆無で、しかも日本の海岸部で継続観察の報告が見られない中、今回実施したので報告する。

方法

2016年6月18日、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所の“北浜”に本種が初出現してから、そこでみられなくなる10月までの期間中、様々な時間帯（最多で1日に14回）で出現状況を調べた。6月中旬から8月中旬にかけての調査時間帯は、北浜産の海岸性昆虫であるシロヘリハンミョウとほぼ同じで、久保田（2016）に記載されている。実験所構内から“北浜”への出口（船着き場斜路の一角）を定点とし、目視で個体数を数え記録した。

結果

6月18日の夕刻、瀬戸臨海実験所の“北浜”で本種の約50個体ほどが、群飛しているのを確認した。地上数m上空を互いに全くぶつかることなく、ほぼ水平的に往来を繰り返した。その翌朝も同様の群飛が見られ、その後も実験所“北浜”と“南浜”や構内の両者間の区域でも見られた。この様に、最多で約50個体ほどの1群れが、構内のあちこちで同時に見られた。“北浜”に初出現してから10日間以内に、実験所から白浜町の中心街へ通ずる海岸道路付近でも本種の群れが見られ、隣

町の上富田町の役場付近の人家上空20m程でも群飛（恐らく本種）が見られた。

本調査定点では、初見日から6月末まで、最多で約50個体が見られ（図1）、それ以上は増えなかった。

6月30日、晴天の午前中に約30—40個体（6時45分に約40個体、9時45分と11時50分に約30個体ずつ）が群飛し、午後には小雨降る14時45分には8個体になったが、雨が止んだ16時45分には約30個体に増加した。

その翌日（7月1日、夜が明けきらない4時50分から夕方まで1時間毎に、本種の出現数を数えた（14回）。その結果、4,5時台は0個体だったが、6時台に最多で10個体の出現、7時台には20個体、8時台に30個体、9時台に10個体、10時台に30個体、11時台には20個体、13,14時台に30個体、15,16,17時台に20個体、18時台には10個体を数えた。この晴天日には一日の時間帯による最多出現数は、多少の差はあったものの、日中ずっと見られた。

続く7月2日から7月15日までの期間中でも、最多で53個体が群飛した。7月16日から7月31日までの期間中も、しばしば約50個体がみられた。しかし、8月1日から15日までには最多で20個体以下になり、8月16日以降はその数はだんだん減少し、10月中旬には全く見られなくなった。

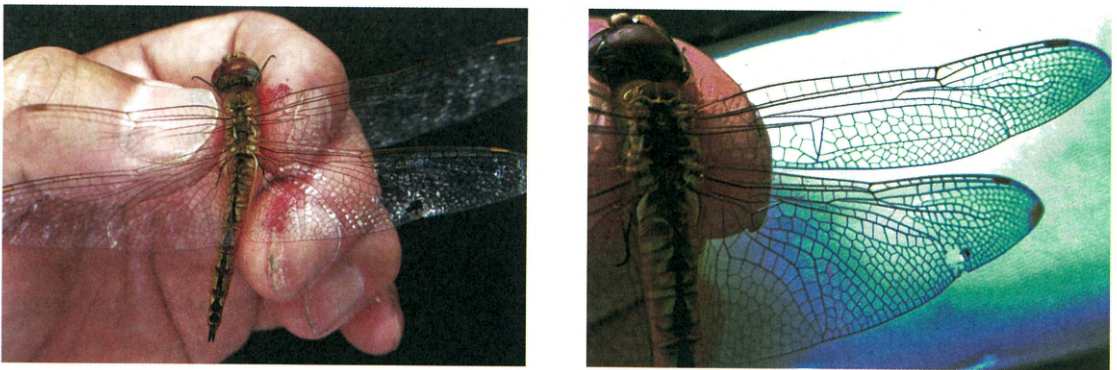


図1 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”で2016年6月25日に網で捕えたウスバキトンボ右は支羽の拡大（撮影後はリリース）

考察

全国一斉ウスバキトンボ調査報告書2016（むさしの里山研究会, 2016b）によると、2016年には県別の本種の初見日が記録され、近畿地方だと大阪府で6月12日、奈良県で6月29日と記録されている（和歌山県からは報告なし）。今回の白浜町での初見日が6月18日であったので、上記の2記録とほぼ一致している。

ところが、兵庫県や愛知県をはじめ、他の多くの地域では4月下旬頃に既に記録されている。これは6月時の下層ジェット気流に乗っての飛来とは異なる気流によるものとの推察がなされている（むさしの里山研究会, 2016a）。

2015年も和歌山県下での報告はないが、近畿地方では2016年の初見日と同様の報告が記録されている（むさしの里山研究会, 2016a）。それによると、奈良県で6月24日、三重県で6月27日だが、兵庫県、大阪府、京都府では4月中旬から5月上旬（台風による影響で早まった可能性が指摘）と

なっている。また、過去数年間の近畿地方での初見日の記録は、2002年は兵庫県明石市で4月26日、2003年の記録はなく、2004年は滋賀県草津市で6月4日、兵庫県洲本市で6月22日、奈良県宇陀郡で5月23日であった（新井, 2007）。

以上の記録をまとめると、近畿地方での本種の初見日は4-6月になっている。しかし、地域や年の数か月のずれは、海岸沿いと内陸部で飛来時期に差（新井, 2014）をもたらす未知の要因が潜んでいると推察される。

本種は、北海道から九州までの地域で、その年に誕生した子孫が全て冬に死滅するのだが、これはグライダー的飛行で気流の方向に逆らい難い性質などが災いし、南下しにくいからなのである。この様な生活を毎年繰り返さざるを得ないウスバキトンボは、サンゴ礁に生息する海洋生物の分布様式の一つのパターンと同様の運命をたどっている様に推察される。つまり、本州の海岸へ黒潮や対馬海流によって南方から運ばれ、その後はそこで成長はするものの、冬季の低水温で死亡するいわゆる死滅回遊（無効分散）と同様（例：久保田ほか, 2011）と考えられる。

謝辞

原稿に目を通し、貴重な情報などを下さった新井 裕氏に深謝致します。

引用文献

新井 裕. 2007: アカトンボの謎, 172pp. どうぶつ社, 東京.

2014: トンボ入門, 141 pp. どうぶつ社, 東京.

久保田 信・田名瀬 英朋・武藤望生・東海林 明・木村一品・中坊徹次. 2011: 和歌山県田辺湾における 2011 年冬季の異例の数の凍死魚の漂着. 漂着物学会誌, 9: 13-16.

久保田 信. 2016: 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所”北浜”でのシロヘリハンミョウ（ハンミョウ科）の出現動態. 日本生物地理学会会報, 71: 243-247.

むさしの里山研究会. 2016a, b: 全国一斉ウスバキトンボ調査報告書 2016.

. 同, 2017.

*〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所